

後発旧制中学の類型化への試みに関する研究

—明治後期以降開校の旧制中学を中心に—

渡 辺 一 弘

Attempts of Categorizing Old Educational System Secondary Schools:
Focusing on Old System Secondary Schools Established
from the Latter Meiji Period Onwards

Kazuhiro WATANABE

【要 旨】

本研究は、第2次中学校令改正が公布された、明治30年代の中等教育の拡張期以降に開校した、後発の旧制中学を類型化し、それぞれのパターンから個別の学校を取り上げ、学校史を中心とした記述資料を用いて検討することで、後発旧制中学の学校文化の特徴を検討する際の基礎作業を行うことを目的とする。分析の結果、主に以下の二点が指摘できる。

第一に、「二中」型の学校は、進学率や1学年の生徒数、学級数、入試倍率において開校時期が重なる「明治後期に開校した中学」「大正前期に開校した中学」「大正後期に開校した中学」の学校よりも高い数値を示した。

第二に、「二中」型の学校は、具体的な学校の事例から、「一中」型の学校に対して対照的に語られることを確認した。

【キーワード】

旧制中学 後発校 類型化 学校文化

1. 問題の所在

中学校令改正（第2次、明治32年）が公布された明治30年代は中等教育の拡張期であり、明治30年に118校5万3千人の生徒数は、10年後の明治39年に271校10万9千人と、2倍以上に増加している¹⁾。本稿は、その時期以降に開校した旧制中学を類型化することを目的とする。

戦前期中学校入学者は、先ず明治30年代の日清日露の戦間期に増加し、その後特に大正中期以降著しく増加した。入学難の緩和のためと原敬内閣の高等学校、専門学校の大増設の政策に呼応して、地方でも中学（主に県立）の増設が行われた（表1）。それまで中学が設置されていなかった地域はもちろんのこと、地方の都市部にはこの時期既存の県立中学に対して第二番目の県立中学²⁾が創設されていた。その中に

は既存の県立中学に対して「二中」³⁾という名称の学校もいくつか創設されていった(表2)。

表1 官公私別中学校数(1895-1940年)

	官立中学校	公立中学校	私立中学校	合計
1895(明治28)	1	79	16	96
1900(明治33)	1	183	34	218
05(明治38)	2	226	43	271
10(明治43)	2	243	66	311
15(大正4)	2	242	77	321
20(大正9)	2	282	84	368
25(大正14)	2	404	96	502
30(昭和5)	2	434	121	557
35(昭和10)	2	437	118	557
40(昭和15)	2	471	126	599

出典：1895-1935は伊藤(1990)311頁、山田(2000)より転載、一部訂正、1940は文部省『全国中学校二関スル諸調査』(昭和15年)学校名称、設立者、学校長、位置、沿革二関スル調、記載校より作成

表2 二中の名称の旧制中学一覧

開校年	校名
明治32年	金沢二中、京都二中
明治33年	仙台二中
明治34年	東京府立二中、鹿児島二中
明治41年	神戸二中
明治43年	沖縄二中
大正2年	札幌二中
大正3年	横浜二中
大正10年	岡山二中
大正11年	広島二中
大正12年	松本二中、鳥取二中
大正13年	東京市立二中、浜松二中、呉二中
大正15年	豊橋二中
昭和2年	日大二中*
昭和3年	岐阜二中
昭和10年	天理二中*
昭和14年	法政二中*

*は私立

出典：渡辺(1999)226頁より転載、一部訂正

周知のとおり、明治の中期頃までに開校した我が国の旧制中学の多くは、その源流を藩校や洋学校・私塾にまで遡ることのできる伝統のあるエリートのための教育機関であり、質実剛健を旨とするような学校が多かった。それに対して明治後期以降開校の「二中」のような後発校は、おそらく既存の「一中」のような先発校に対抗意識をもって、教職員・生徒一丸となって

校風を作っていたと考えられる。その際、果たして「二中」型の後発校の校風は「一中」型の先発校を模範として形成されていったのであろうか、それとも「一中」型の先発校とは異なる独自のモデルを目指して形成されていったのであろうか。そしてそのような学校の風土は、戦後に「二中」の伝統を引き継いだ学校において、学制改革、高校再編、入試制度の変化等に伴いどれほど受け継がれていて、また受け継がれていないのであろうか。

以上の問題意識の下、筆者は、これまで中国四国教育学会大会において「戦前期における中等学校文化に関する研究-岡山県を事例にして」という発表題目で、学校の沿革史・教育史資料を中心とした記述資料を用いて岡山一中と岡山二中を比較検討した。その結果岡山二中の学校文化が岡山一中を非常に意識したもので⁴⁾、質実剛健でスパルタ的に生徒を鍛えて岡山一中に追いつき追い越そうとする部分と、教職員と生徒が一家族的な大らかな部分を持ち、エリート校で受験準備予備校的な性格をもつ岡山一中と対照的な部分との、矛盾する2つの面をもつことを明らかにした。

また、日本子ども社会学会大会において「戦前期における中等学校文化に関する研究-広島県呉市を事例にして-」という発表題目で、学校の沿革史等の記述資料と卒業生・学校関係者への聞き取り調査を用いて呉一中と呉二中を比較検討し、岡山の事例と同様に、呉二中の学校文化は質実剛健ではあるが自由かつ大らかなもので、呉一中について対抗意識の非常に強いものであること⁵⁾を明らかにした。

しかし、当然のことながら岡山二中と呉二中の事例だけで後発旧制中学の学校文化を一般化することはできない。そもそも後発旧制中学の中で「二中」という名称の学校の割合はどれくらいなのか、また「二中」型の学校はどれくらいあるのか、それらの学校は先発校とはどういう関係なのか(例えば本校-分校の関係)。このような疑問に対処すべく、まずは旧制中学全体を分類し、特に後発校に焦点を当て、分類したそれぞれを比較検討する。次に個別の学校を

取り上げ、学校史を中心とした記述資料を用いてその特徴を検討することを試みる。本稿は、後に後発校の学校文化の特徴を検討する際の基礎作業となるものである。

2. 分析方法と分析資料

(1) 分析方法

伊藤(1990)は戦前期中等教育を4つの時代に区分し、その4番目を「転換期」(1899(明治32) - 1945(昭和20)年)とし、さらに同年齢層における中等教育人口が15%を越える大正期中葉をもって「エリート型」と「マス」型に細分した。本稿でもそれを参考にして、旧制中学の開校年⁶⁾と各「中学校令改正」を基に便宜上以下の5つの時期に分類し、それに従って分析した。

- ①明治31年までに開校した中学
- ②明治32 - 45年に開校した中学 (* 明治32年、中学校令改正、第2次)
- ③大正2 - 7年に開校した中学 (* 大正元年も含む)
- ④大正8 - 15年に開校した中学 (* 大正8年、中学校令改正、第3次)
- ⑤昭和2 - 15年に開校した中学 (* 昭和元年も含む)

本稿ではこの①、②を先発校、③、④、⑤を後発校と定義した。また本稿で言うところの分校とは、『全国中学校ニ関スル諸調査』の昭和15年度版の「学校沿革ニ関スル調」で分校と記載されている学校である⁷⁾。次に「二中」型の学校の定義は、公立で東京と大阪を除く地方の都市部に開校した「二中」の名称をもつ中学と、公立で東京と大阪を除く地方の都市部に2番目以降に開校した中学で大正期以降創設の学校⁸⁾、とした。

具体的な分析方法は、上記の5つの時期に則してまず先発校と後発校の全体数、割合、地域別の状況を調べる。さらに分校として開校した学校の数と割合、「二中」型の学校の数と割合

を調べる。次に後発校を中心に、先発校、後発校、分校、「二中」型の学校を上級学校進学状況、1学年の生徒数、学級数、入試倍率で比較検討する。最後に具体的な学校の事例を取り上げ、学校史と聞き取り調査等を中心に特徴を検討する。なお、聞き取り調査は、1999年8月から2004年8月にかけて、11回実施した。

(2) 分析資料

分析資料は、文部省『全国中学校ニ関スル諸調査』各年度、その他旧制中学校やその伝統を持つ高校の学校史・沿革史、卒業生の回顧録、報告者の卒業生に対する聞き取り等を用いる。なお学校の分類に関しては、『全国中学校ニ関スル諸調査』の昭和15年度版(*上級学校進学状況、1学年の生徒数、学級数、入試倍率は『全国中学校ニ関スル諸調査』の昭和13年度版)を用いたので、昭和15年現在で設置されている学校が分析対象である⁹⁾。

3. 結果と考察

表3は先発校と後発校の数と割合を示したものである。昭和15年の時点で官立中学を除いた中学校の数は597校で、先発校と後発校の割合はほぼ1 : 1である。私立の割合は、後発校の方が6%程高い。

表3 先発校と後発校の数と割合

	先発校	後発校	合計
学校数	306(59)	291(67)	597(126)
%	51.3(46.8)	48.7(53.2)	100.0

*官立中学は除く、カッコは私立、以下の表も同じ文部省『全国中学校ニ関スル諸調査』(昭和15年)より作成

これを地域別にみたのが表4である。この表から後発校の割合は、北海道が約80%ともっとも高く、他の地域では、東京と中部を除いてすべての地域で後発校の割合が先発校に比べて低いことがわかる。

表4 先発校と後発校の地域別の数と割合

	先発校(%)	後発校(%)	合計
北海道	5 (1) (19.2)	21 (80.8)	26 (1)
東北	29 (2) (59.2)	20 (2) (40.8)	49 (4)
関東甲信越	60 (3) (55.6)	48 (11) (44.4)	108 (14)
東京	31 (27) (44.9)	38 (20) (55.1)	69 (47)
中部	37 (4) (49.3)	38 (3) (50.7)	75 (7)
近畿	44 (9) (52.4)	40 (12) (47.6)	84 (21)
中国・四国	51 (10) (56.0)	40 (11) (44.0)	91 (21)
九州・沖縄	49 (3) (51.6)	46 (8) (48.4)	95 (11)

文部省『全国中学校ニ関スル諸調査』(昭和15年)より作成

表5 全体の分類

	①	②	③	④	⑤	合計
北海道	2	3 (1)	3	12	6	26 (1)
東北	15	14 (2)	1	15 (2)	4	49 (4)
関東甲信越	29 (2)	31 (1)	4 (1)	29 (4)	15 (6)	108 (14)
東京	17 (15)	14 (12)	2 (2)	11 (5)	25 (13)	69 (47)
中部	17	20 (4)	1	27 (1)	10 (2)	75 (7)
近畿	21 (1)	23 (8)	3 (1)	23 (3)	14 (8)	84 (21)
中国・四国	28 (1)	23 (9)	2 (2)	30 (5)	8 (4)	91 (21)
九州・沖縄	24	25 (3)	9 (2)	25 (1)	12 (5)	95 (11)
合計	153 (19)	153 (40)	25 (8)	172 (21)	94 (38)	597 (126)
%	25.6 (15.1)	25.6 (31.7)	4.2 (6.3)	28.8 (16.7)	15.7 (30.2)	100.0

文部省『全国中学校ニ関スル諸調査』(昭和15年)より作成

表5-1 後発校の分類

	③	④	⑤	合計
北海道	3	12	6	21
東北	1	15 (2)	4	20 (2)
関東甲信越	4 (1)	29 (4)	15 (6)	48 (11)
東京	2 (2)	11 (5)	25 (13)	38 (20)
中部	1	27 (1)	10 (2)	38 (3)
近畿	3 (1)	23 (3)	14 (8)	40 (12)
中国・四国	2 (2)	30 (5)	8 (4)	40 (11)
九州・沖縄	9 (2)	25 (1)	12 (5)	46 (8)
合計	25 (8)	172 (21)	94 (38)	291 (67)
%	8.6 (11.9)	59.1(31.3)	32.3(56.7)	100.0

文部省『全国中学校ニ関スル諸調査』(昭和15年)より作成

表6は分校の数と割合を示したものである。分校はすべて公立で、北海道と東京除いた地域に分散している。1校を除いて①と②の明治期に開校した学校である。なおこの1校は沖縄県の宮古中(昭和3年開校)である。

表7は「二中」型の学校の数と割合を示したものである。「二中」型の学校は全国的に分散

表5、5-1は旧制中学全体と後発校を先の5つの分類に従って分けたものである。④の大正後期の時期に開校した学校が約30%ともしっかりと多く、後発校の中でも60%近くを占め、その8割以上は公立であることがわかる。私立は先発校では②の明治後期の時期に開校した学校が、2/3を占め、後発校では⑤の昭和に開校した学校が過半数を占めることがわかる。

表6 分校の数と割合

	①	②	③	④	⑤	合計
北海道	0	0	0	0	0	0
東北	4	3	0	0	0	7
関東甲信越	8	14	0	0	0	22
東京	0	0	0	0	0	0
中部	5	1	0	0	0	6
近畿	2	1	0	0	0	3
中国・四国	9	5	0	0	0	14
九州・沖縄	8	10	0	0	1	19
合計	36	34	0	0	1	71
%	50.7	47.9	0	0	1.4	100.0

文部省『全国中学校ニ関スル諸調査』(昭和15年)より作成

しており、時期的には④と⑤の大正中期以降から昭和にかけて70%が開校している。なお二中かつ分校である学校は、鹿児島二中(明治34年開校、鹿児島一中の分校)、沖縄二中(明治43年開校、沖縄一中の分校)の2校である。

以上の結果をまとめると、以下の5点が明らかになった。

表7 「二中」型の学校の数と割合

	①	②	③	④	⑤	合計
北海道	0	0	1	1	2	4
東北	0	1	0	0	1	2
関東甲信越	0	0	1	2	2	5
東京	0	0	0	0	0	0
中部	0	3	0	5	3	11
近畿	0	3	0	2	1	6
中国・四国	0	0	0	4	1	5
九州・沖縄	0	2	1	1	3	7
合計	0	9	3	15	13	40
%	0	22.5	7.5	37.5	32.5	100.0

文部省『全国中学校ニ関スル諸調査』（昭和15年）より作成

1. 先発校と後発校の割合はほぼ1：1で、私立の割合は後発校の方が少し高くなる。
2. 後発校の割合を地域別にみると、北海道が約80%を占めるが、他のほとんどの地域は先発校より低い。
3. 時期的にみると、大正中期から後期にかけて開校した学校がもっとも多く、その多くは公立である。
4. 分校として開校した中学は、すべて公立で1校を除いて明治期に開校している。
5. 「二中」型の学校は、大正中期以降から昭和にかけて70%が開校している。

次に上級学校進学状況、1学年の生徒数、学級数、入試倍率を基に①から④までの時期に開校した学校と分校、「二中」型の学校、それに新たに「一中」型の学校を加えて比較検討する。なお昭和13年度版の資料を用いたのは、昭和15年度版の資料に学校別のデータがないことと、まだ卒業生の出ていない学校があるからである。上級学校進学状況は、昭和13年の春の高等学校・大学予科入学者数、官公立専門学校入学者数、軍関係諸学校入学者数を調べたもので、この中には中途退学による入学者は含まない。

1学年の生徒数と学級数は、昭和13年10月時点の1年生の生徒数と学級数を用いた。入試倍率は、同じく昭和13年10月時点の1年生を対象に、志願者を入学者で除したものである。

新たに加えた「一中」型の学校とは、筆者が今回の分析で「二中」型の学校とした学校と対

応関係にあると判断した学校である。具体的な分析対象の学校並びに分析結果は、分校、「二中」型の学校とともに表8-1, 2、表9-1, 2、表10-1, 2に示す。これらに①から④までの学校を加えて平均値をまとめて整理したのが表11である。

表8-1から分校は、1つの学校の分校が県下全域に広がっているパターン（例えば群馬県、山口県、鹿児島県など）と、分校の分校というように枝分かれして広がっているパターン（例えば茨城県、愛媛県など）の大きく2つに分けられことがわかる。また都市部の「一中」型、「二中」型の学校（例えば浜松一中、鹿児島二中など）から離島の学校（例えば壱岐中、種子島中など）まで多岐に渡っている。

表8-2は、分校の上級学校進学状況と、生徒数、学級数、入試倍率をまとめたものである。浜松一中、畝傍中、熊本中、鹿本中、鹿児島二中などが、高校・大学予科の進学者が多いことが分かる。

表9-1、10-1から、「一中」型の学校と対応関係にあると考えられる学校が複数あるのは、横浜一中が2校、金沢一中が2校、愛知一中が3校、京都一中が3校、神戸一中が2校である。表9-2、10-2をみると「一中」型の学校と「二中」型の学校の進学率を比較した場合、「一中」型の学校の進学率が高い場合が多い。しかし進学率がほぼ同じか、むしろ「二中」型の学校の方が高い場合も6校程みられる。仙台二中、神通中、京都三中、桃山中、福岡中、鹿児島二中などである。これらの学校は神通中を除いて、明治期に開校した学校か、地域の拠点都市に開校した学校である。

表11の結果をまとめると、以下の5点が明らかになった。

1. 開校の時期が下がるに比例して進学率は低くなる。
2. 進学率は「一中」型の学校がもっとも高い。
3. 「二中」型の学校は、「一中」型の学校に次いで①の学校と同程度、進学率が高い。
4. 1学年の生徒数と学級数は進学率が高いほ

ど多い。

5. 入試の倍率は「二中」型の学校がもっとも高い。

最後に具体的な学校の事例として、筆者が調査を行っている岡山二中と岡山一中、呉二中と呉一中について、両校の学校関係資料の記述と、関係者への聞き取り調査から、両校の校訓、学校文化（校風）、雰囲気等を比較検討する形で取り上げる。

【岡山二中】

「(略) 当時一中は今で云う受験校で、ガリベンで上級学校へはいれるといった空気があったようで、六高でも私の組の半数は一中卒でしたが、例外はあっても一般にチャッカリした人が多く、二中から来た人は、数は少なかったが、のんびり型が多く今からも好ましいように思います」(下線は引用者、以下同様) (O・M 昭和5年卒) (岡山操山高等学校 1969, 『創立七十年史』 289頁)

「(略) 当時はよく一中と対比されたが、私は、都会的なエリート校の悪く言えば、ギスギスした感じの一中より、おおらかな農村的な二中カラーの方が好きだった」(K・S 昭和19年卒) (同上 1969 330頁)

【岡山一中】

「一中での勉学の有様はどうかといいますが、これも厳しいという一語に尽きると思います。(大正10年の卒業生)」(太田進 1979, 「大正期における入試制度の変動と岡山中学・岡山一中の対応」『岡山朝日高等学校 教育史資料第6集』 9頁)

「(略) 当時の一中生は、岡山市民から六高生とはまた違った意味でエリート扱いされていた」(O・M 昭和10年四年修了) (岡山朝日高等学校 1984, 『回想による110年史 烏城』第140号 62頁)

以上の点から、岡山二中はのんびり(温かい)で大らかな様子が、岡山一中はエリート(冷たい)で勉強が厳しいという様子が伺える。

【呉二中】

「一中と比べて、その点二中は大らかな特徴があったと思いますね。『自由』という言葉では表現が悪いのですが、質実剛健であって大らかな自由さがありました」(N・T 昭和13年卒) (九嶺宮原同窓会 1974, 『創立五十周年記念誌 広島県立呉宮原高等学校』 104頁)

「私が入学した頃の呉二中は自由と個性の教育を行うとされ、統制色の強い一中とは好対照とされていた」(M・H 昭和15年卒) (同上 1974 343頁)

「二中は大らかさ、質実剛健、のびのび、野生児だった。これは当時の校長のリーダーシップや教員の年齢の若さが関係していたのでは、と思う。それに対して一中は、質実剛健であってもやはりガリベン型の生徒が多かったように思う。一中は海軍士官の子弟や裕福な家庭の子が多かったからだと思う」(T・S 昭和10年卒) (筆者聞き取り)

「二中は学校の歴史が新しいので生徒同士の仲が良く、先輩後輩の結びつきも強く学年が違っても仲が良く団結力があつた。一中は海軍の高官の息子やら転勤族が多く、エリート校という感じがした」(S・H 昭和13年卒) (同上)

【呉一中】

「(略) 質実剛健をモットーに、スパルタ式の教育を受けたものでした。卒業して八年振りに母校に帰ってみても(*教員として勤務)、教育方針は、私の受けたものと、ちっとも変わってはいませんでした。その上、大正十四年五月からは、配属将校が学校に派遣され、質実剛健の精神は一層強調され、学力の充実に一段と力が注がれました」(M・T 明治44年入学) (昭四会 1979, 『呉一中卒業五十周年記念誌』

表8-1 分校一覧(*⑤を除く)

道府県別	学校名	設立別	開校年	個数	通し番号	
青森	八戸中	県立	M26	1	1	*弘前中の分校
宮城	古川中	県立	M30	1	2	*仙台一中の分校
	角田中	県立	M30	2	3	*仙台一中の分校、M34に郡立→県立
	佐沼中	県立	M35	3	4	*仙台二中の分校
	築館中	県立	M34	4	5	*古川中の分校
山形	新庄中	県立	M33	1	6	*山形中の分校
福島	磐城中	県立	M28	1	7	*安積中の分校
茨城	土浦中	県立	M30	1	8	*水戸中の分校
	下妻中	県立	M30	2	9	*水戸中の分校
	太田中	県立	M33	3	10	*水戸中の分校
	龍ヶ崎中	県立	M33	4	11	*土浦中の分校
	水海道中	県立	M33	5	12	*下妻中の分校
栃木	栃木中	県立	M29	1	13	*宇都宮中の分校
群馬	沼田中	県立	M30	1	14	*前橋中の分校
	高崎中	県立	M30	2	15	*前橋中の分校
	富岡中	県立	M30	3	16	*前橋中の分校
	藤岡中	県立	M30	4	17	*前橋中の分校
	太田中	県立	M30	5	18	*前橋中の分校
千葉	成東中	県立	M33	1	19	*佐倉中の分校
	木更津中	県立	M33	2	20	*千葉中の分校
新潟	巻中	県立	M40	1	21	*新潟中の分校
	三条中	県立	M35	2	22	*新潟中の分校
	小千谷中	県立	M35	3	23	*長岡中の分校
	糸魚川中	県立	M40	4	24	*高田中の分校
	柏崎中	県立	M33	5	25	*高田中の分校
	村上中	県立	M33	6	26	*新発田中の分校
長野	大町中	県立	M34	1	27	*松本中の分校
	飯山中	県立	M36	2	28	*長野中の分校
	野沢中	県立	M34	3	29	*上田中の分校
福井	小浜中	県立	M26	1	30	*福井中の分校
	大野中	県立	M34	2	31	*福井中の分校
岐阜	大垣中	県立	M27	1	32	*岐阜中の分校
	東濃中	県立	M29	2	33	*岐阜中の分校
静岡	浜松一中	県立	M27	1	34	*静岡中の分校
	韮山中	県立	M28	2	35	*静岡中の分校
奈良	畝傍中	県立	M29	1	36	*郡山中の分校
	五条中	県立	M29	2	37	*郡山中の分校
和歌山	新宮中	県立	M34	1	38	*粉河中の分校
岡山	天城中	県立	M39	1	39	*関西中の分校、T10に郡立→県立
山口	岩国中	県立	M30	1	40	*山口中の分校
	徳山中	県立	M30	2	41	*山口中の分校
	萩中	県立	M30	3	42	*山口中の分校
	豊浦中	県立	M30	4	43	*山口中の分校
徳島	脇町中	県立	M29	1	44	*徳島中の分校
	富岡中	県立	M29	2	45	*徳島中の分校
香川	丸亀中	県立	M26	1	46	*高松中の分校
	大川中	県立	M33	2	47	*高松中の分校
	三豊中	県立	M33	3	48	*高松中の分校
愛媛	宇和島中	県立	M29	1	49	*松山中の分校
	西条中	県立	M29	2	50	*松山中の分校
	大洲中	県立	M34	3	51	*宇和島中の分校
	今治中	県立	M34	4	52	*西条中の分校
佐賀	鹿島中	県立	M29	1	53	*佐賀中の分校
	唐津中	県立	M29	2	54	*佐賀中の分校
佐賀	小城	県立	M32	1	55	*佐賀中の分校
長崎	壱岐中	県立	M42	1	56	*猶興館中の分校
熊本	天草中	県立	M33	1	57	*済々黌中の分校
	熊本中	県立	M33	2	58	*済々黌中より分離、分校扱い
	玉名中	県立	M36	3	59	*熊本中の分校
	八代中	県立	M33	4	60	*済々黌中の分校
	鹿本中	県立	M33	5	61	*熊本中の分校
大分	杵築中	県立	M30	1	62	*大分中の分校
	臼杵中	県立	M30	2	63	*大分中の分校
	竹田中	県立	M30	3	64	*大分中の分校
	宇佐中	県立	M30	4	65	*大分中の分校
鹿児島	川内中	県立	M30	1	66	*鹿児島一中の分校
	加治木中	県立	M30	2	67	*鹿児島一中の分校
	鹿児島二中	県立	M34	3	68	*鹿児島一中の分校
	種子島中	県立	M34	4	69	*鹿児島一中の分校
沖縄	沖縄二中	県立	M43	1	70	*沖縄一中の分校

表8-2 分校の上級学校進学状況と生徒数、学級数、入試倍率(*⑤を除く)

道府県別	学校名	高・大予科	官公専門学校	軍関係諸学校	合計	1学年生徒数	学級数	入試倍率
青森	八戸中	2	11	0	13	158	3	1.5
	宮城	1	11	0	12	165	3	1.5
	角田中	1	2	1	4	119	2	1.2
山形	佐沼中	2	3	2	7	110	2	1.4
	築館中	4	3	1	8	113	2	1.2
	新庄中	4	15	0	19	103	2	1.6
	磐城中	5	13	0	18	257	5	2.0
福島	茨城	3	12	0	15	152	3	2.1
	土浦中	7	10	0	17	159	3	1.6
	下妻中	3	4	2	9	155	3	1.8
	太田中	1	7	0	8	158	3	1.4
	龍ヶ崎中	1	2	1	4	111	2	1.5
栃木	水海道中	4	9	7	20	211	4	1.8
	栃木中	2	5	2	9	113	2	1.4
群馬	沼田中	1	17	9	27	161	3	1.8
	高崎中	4	17	2	23	110	2	1.9
	富岡中	0	2	0	2	111	2	1.8
	藤岡中	1	9	2	12	162	3	1.6
	太田中	5	5	5	15	214	4	1.2
千葉	成東中	4	2	2	8	155	3	1.5
	木更津中	2	5	0	7	112	2	2.5
新潟	巻中	6	4	1	11	145	3	1.6
	三条中	5	3	1	9	53	1	1.9
	小千谷中	0	3	0	3	96	2	1.2
	糸魚川中	6	8	0	14	99	2	2.3
	柏崎中	1	7	0	8	109	2	1.5
	村上中	3	3	0	6	103	2	1.2
長野	大町中	0	1	0	1	54	1	1.6
	飯山中	2	1	0	3	110	2	1.6
	野沢中	2	12	0	14	106	2	1.9
福井	小浜中	0	7	1	8	109	2	1.7
	大野中	5	36	2	43	156	3	1.5
岐阜	大垣中	3	2	0	5	51	1	1.6
	東濃中	13	37	10	60	213	4	1.5
静岡	浜松一中	0	8	0	8	108	2	1.4
	菰山中	24	39	3	66	199	4	1.5
奈良	畝傍中	1	14	0	15	149	3	1.5
	五条中	5	6	1	12	102	2	1.4
和歌山	新宮中	0	1	8	9	107	2	2.1
岡山	天城中	2	14	0	16	150	3	2.0
	山口	5	2	13	20	150	3	2.0
	若国中	3	12	2	17	150	3	2.1
	徳山中	4	17	8	29	198	4	2.9
徳島	脇町中	0	1	0	1	106	2	1.6
	富岡中	2	8	1	11	150	3	1.7
香川	丸亀中	11	14	0	25	205	4	1.7
	大川中	2	3	4	9	101	2	1.3
	三豊中	9	11	2	22	151	3	1.6
愛媛	宇和島中	6	6	0	12	153	3	1.4
	西条中	8	14	4	26	207	4	1.7
	大洲中	3	2	0	5	98	2	1.5
	今治中	8	11	8	27	205	4	1.5
佐賀	鹿島中	5	3	1	9	157	3	1.7
	唐津中	4	12	2	18	159	3	1.8
	小城中	5	5	2	12	164	3	2.0
長崎	壱岐中	1	1	1	3	58	1	1.9
	熊本	3	15	2	20	108	2	1.7
大分	天草中	19	26	16	61	228	4	1.9
	熊本中	2	12	11	25	220	4	1.3
	玉名中	5	34	4	43	215	4	1.5
	八代中	10	20	13	43	218	4	1.9
	鹿本中	2	8	0	10	153	3	2.0
鹿児島	杵築中	0	11	1	12	157	3	2.1
	臼杵中	5	6	1	12	115	2	1.9
	竹田中	3	28	1	32	210	4	1.8
	宇佐中	8	8	1	17	209	4	1.7
鹿児島	川内中	1	16	0	17	201	4	1.5
	加治木中	29	19	26	74	257	5	2.4
	鹿児島二中	0	3	1	4	50	1	1.4
沖縄	種子島中	2	13	9	24	156	3	2.0
	沖繩二中							
	合計	300	711	197	1208	10237	195	118.4
	平均	4.3	10.2	2.8	17.3	146.2	2.8	1.69

表9-1 「二中」型の学校一覧(*⑤を除く)

道府県別	学校名	設立別	開校年	備考	個数	通し番号
北海道	札幌二中	道立	T2	二中	1	1
	小樽市中	市立	T13	二中的	2	2
宮城	仙台二中	県立	M33	二中	1	3
	横浜二中	県立	T3	二中	1	4
神奈川	横浜三中	県立	T12	二中的	2	5
	松本二中	県立	T12	二中	1	6
長野	神通中	県立	T9	二中的	1	7
富山	金沢二中	県立	M32	二中	1	8
	金沢三中	県立	T10	二中的	2	9
静岡	浜松二中	県立	T13	二中	1	10
	明倫中	県立	M32	二中的	1	11
愛知	熱田中	県立	M40	二中的	2	12
	惟信中	県立	T14	二中的	3	13
	豊橋二中	県立	T15	二中	4	14
	京都二中	府立	M32	二中	1	15
京都	京都三中	府立	M41	二中的	2	16
	桃山中	府立	T10	二中的	3	17
	神戸二中	県立	M41	二中	1	18
兵庫	神戸三中	県立	T10	二中的	2	19
	鳥取二中	県立	T12	二中	1	20
鳥取	岡山二中	県立	T10	二中	1	21
岡山	広島二中	県立	T11	二中	1	22
	呉二中	県立	T13	二中	2	23
福岡	福岡中	県立	T6	二中的	1	24
	瓊浦中	県立	T12	二中的	1	25
長崎	鹿児島二中	県立	M34	二中・分校	1	26
鹿児島	沖縄二中	県立	M43	二中・分校	1	27
沖縄						

M33に私立→県立

*鹿児島一中の分校

*沖縄一中の分校

表9-2 「二中」型の学校の上級学校進学状況と生徒数、学級数、入試倍率(*⑤を除く)

道府県別	学校名	高・大予科	官公専門学校	軍関係諸学校	合計	1学年生徒数	学級数	入試倍率
北海道	札幌二中	16	18	0	34	257	5	2.6
	小樽市中	0	1	0	1	104	2	1.9
宮城	仙台二中	22	18	3	43	226	4	2.1
	横浜二中	21	20	1	42	146	3	2.4
神奈川	横浜三中	6	18	0	24	159	3	2.4
	松本二中	3	2	0	5	156	3	1.8
長野	神通中	16	20	0	36	163	3	1.8
	金沢二中	9	28	4	41	167	3	1.6
富山	金沢三中	2	6	0	8	167	3	1.7
	浜松二中	5	41	1	47	112	2	2.4
静岡	明倫中	13	28	6	47	232	5	2.5
	熱田中	22	37	0	59	251	5	2.5
	惟信中	4	14	0	18	202	4	2.5
	豊橋二中	2	18	5	25	152	3	1.8
京都	京都二中	5	10	2	17	256	5	1.9
	京都三中	18	20	1	39	215	4	1.8
	桃山中	27	21	1	49	219	4	1.8
兵庫	神戸二中	45	38	3	86	264	5	1.8
	神戸三中	15	28	3	46	254	5	2.2
鳥取	鳥取二中	9	15	2	26	111	2	1.7
岡山	岡山二中	13	25	0	38	259	5	2.5
広島	広島二中	13	21	0	34	269	5	3.7
	呉二中	2	11	0	13	215	4	2.9
福岡	福岡中	25	12	0	37	263	5	1.7
	瓊浦中	2	19	1	22	220	4	2.1
長崎	鹿児島二中	29	19	26	74	257	5	2.4
鹿児島	沖縄二中	2	13	9	24	156	3	2.0
沖縄	合計	346	521	68	935	5452	104	58.6
	平均	12.8	19.3	2.5	34.6	201.9	3.9	2.17

表10-1 「一中」型の学校一覧

道府県別	学校名	設立別	開校年	備考	個数	通し番号
北海道	札幌一中	道立	M28		1	1
	小樽中	道立	M35		2	2
宮城	仙台一中	県立	M25		1	3
神奈川	横浜一中	県立	M30		1	4
長野	松本中	県立	M17		1	5
富山	富山中	県立	M18		1	6
石川	金沢一中	県立	M26		1	7
静岡	浜松一中	県立	M27	分校	1	8
愛知	愛知一中	県立	M10		1	9
	豊橋中	県立	M28		2	10
京都	京都一中	府立	M3		1	11
兵庫	神戸一中	県立	M29		1	12
鳥取	鳥取一中	県立	M19		1	13
岡山	岡山一中	県立	M7		1	14
広島	広島一中	県立	M10		1	15
	呉一中	県立	M40		2	16
福岡	修猷館中	県立	M18		1	17
長崎	長崎中	県立	M17		1	18
鹿児島	鹿児島一中	県立	M26		1	19
沖縄	沖縄一中	県立	M13		1	20

* 静岡中の分校
M33に町立→県立
M25に県立に移管
M44に市立→県立
M32に県立に移管

表10-2 「一中」型の学校の上級学校進学状況と生徒数、学級数、入試倍率

道府県別	学校名	高・大予科	官公専門学校	軍関係諸学校	合計	1学年生徒数	学級数	入試倍率
北海道	札幌一中	37	18	0	55	252	5	2.2
	小樽中	8	34	1	43	260	5	1.7
宮城	仙台一中	16	19	7	42	212	4	2.2
神奈川	横浜一中	38	33	9	80	219	4	2.1
長野	松本中	7	18	5	30	206	4	1.8
富山	富山中	1	24	1	26	206	4	2.1
石川	金沢一中	17	24	3	44	210	4	1.4
静岡	浜松一中	13	37	10	60	213	4	1.5
愛知	愛知一中	34	60	8	102	249	5	1.7
	豊橋中	13	43	2	58	202	4	1.5
京都	京都一中	24	15	1	40	255	5	1.4
兵庫	神戸一中	73	33	9	115	247	5	1.6
鳥取	鳥取一中	11	9	1	21	218	4	1.5
岡山	岡山一中	36	31	8	75	261	5	1.8
広島	広島一中	15	26	10	51	255	5	2.7
	呉一中	22	80	14	116	222	4	2.3
福岡	修猷館中	22	13	9	44	264	5	1.5
長崎	長崎中	19	22	5	46	208	4	1.5
鹿児島	鹿児島一中	16	6	16	38	262	5	1.8
沖縄	沖縄一中	3	17	1	21	222	4	1.6
	合計	425	562	120	1107	4643	89	35.8
	平均	21.3	28.1	6.0	55.4	232.2	4.5	1.79

表11 上級学校進学状況と生徒数、学級数、入試倍率の比較

	高・大予科	官公専門学校	軍関係諸学校	合計	1学年生徒数	学級数	入試倍率
①	13.4	17.1	3.3	33.8	193.8	3.7	1.94
②	7.2	10.8	2.3	20.3	164.0	3.1	1.85
③	9.3	11.3	0.8	21.4	167.8	3.1	1.88
④	5.5	8.9	1.0	15.4	132.1	2.5	1.86
分校	4.3	10.2	2.8	17.3	146.2	2.8	1.69
「一中」型	21.3	28.1	6.0	55.4	232.2	4.5	1.79
「二中」型	12.8	19.3	2.5	34.6	201.9	3.9	2.17
平均	10.5	15.1	2.7	28.3	176.9	3.4	1.88

1 頁)

「質実剛健の校訓。規律正しい生活。軍国主義教育の体罰はつらかったけど、旧制呉一中で人生を生き抜く強さを教えられた」(T・Y 昭和12年入学) (『読売新聞』広島版 1998年4月25日「わが母校11呉三津田高校③」)

以上の点から、呉二中は質実剛健だが大らか¹⁰⁾で自由な様子が、呉一中は質実剛健で厳しい様子が伺える。

4. まとめ

本稿の目的は、明治後期以降に開校した旧制中学を類型化し、それぞれのパターンから個別の学校を取り上げ、後発旧制中学の学校文化の特徴を検討する際の基礎作業を行うことであった。分析の結果、筆者が定義した「二中」型の学校は、進学率や1学年の生徒数、学級数、入試倍率において開校時期が重なる②から④の学校よりも高い数値を示した。また具体的な学校の事例から、「一中」型の学校に対して対照的に語られることを確認した。

しかし、これは筆者の定義の仕方とサンプル数の少なさもその要因の一つであろう。逆に分校については厳密な定義をしなかったために、学校の状況が多岐に渡り解釈ができなかった。結果として、正確な類型化までたどり着くことはできなかった。

今後の課題としては、まずは分析方法を再検討する必要がある。また学校のカリキュラム、生徒の階層、教員集団の問題等も検討する必要があるだろう。今回詳しい分析をしなかった、私立校や「一中」型、「二中」型、分校以外のその他の学校の位置づけも考える必要があるだろう。これらを踏まえて、岡山と呉の事例研究と、新たに他の地域の事例研究をやる上で指針となるような分析方法、分析の指標といったものを検討したいと思う。

【註】

- 1) 国立教育研究所編 1974、『日本近代教育百年史 第四巻 学校教育2』財団法人教育研究振興会 1059頁。
- 2) 最初は市立として設置され、後に県立に移管した学校もあった。
- 3) ここで言うところの「二中」とは、主として大正中期以降、地方都市部に開校していった中学を指し、明治19年の「中学校令」公布後、各府県で何度か改称した校名の内の一つの〇〇県第二尋常中学の「二中」とは異なる。
- 4) 例えば岡山一中が中学では珍しい角帽を制帽としていたのに対し、岡山二中も出来るときに、やはり角帽を採用した(岡山操山高等学校創立七十年史編集委員会編 1969、『創立七十年史』)。
- 5) 例えば呉二中卒業生に対する聞き取り調査では、「二中は新しい学校だから、先に出来た一中に負けるな、と先生や先輩から言われた。勉強、スポーツ、何でも負けるなと言われた。若い先生が多かったので、先生達も一中に対してかなり対抗意識をもっていたと思う」(N・R 昭和19年卒)、というのがあった。
- 6) 開校年が不明の学校は、設置年で判断した。
- 7) 熊本中学は分校という記述はなかったが、「済々黌ヨリ分離シ」とあったので分校とみなした。
- 8) ただし名古屋市の明倫中(明治32年開校)・熱田中(明治40年開校)、京都市の京都三中(明治41年開校)は、明治期の開校であるが例外として「二中」型の学校とみなした。
- 9) 『全国中学校二閩スル諸調査』には官立中学(東京高師附属中、広島高師附属中)に関する記載がないので、官立は分析から除外した。また一部記載もれの学校もある。
- 10) 呉二中の学校関係資料と聞き取り調査から、「大らか」という言葉を多く見聞きしたが、この言葉は校歌の歌詞の一節にあるものである。

【主要参考文献・資料】

- 伊藤彌彦 1990,「日本近代中等前期教育の形成と展開」望田幸男他編『国際比較・近代中等教育の構造と機能』名古屋大学出版会。
- 太田進 1979,「大正期における入試制度の変動と岡山中学・岡山一中の対応」『岡山朝日高等学校 教育史資料 第6集』 9頁。

- 岡山朝日高等学校 1984,『回想による110年史 鳥城』第140号 62頁。
- 岡山操山高等学校 1969,『創立七十年史』。
- 九嶺宮原同窓会 1974,『創立五十周年記念誌 広島県立呉宮原高等学校』。
- 国立教育研究所編 1974,『日本近代教育百年史 第四卷 学校教育2』財団法人教育研究振興会。
- 1974,『日本近代教育百年史 第四卷 学校教育3』財団法人教育研究振興会。
- 昭四会 1979,『呉一中卒業五十周年記念誌』。
- 中等教育史研究会編 1990,『旧制中学校沿革史文献目録』。
- 山田浩之 2000,「日本教育史統計データベース」。
- 米田俊彦 1984,「明治後期地方中間層の中学校像とその変質—中学校設立運動を中心として—」『東京大学教育学部紀要 第24巻』。
- 1985,「[中等社会] 育成をめぐる相剋—1899年(明治32)改正中学校令の制定過程とその意味—」『日本の教育史学第28集』。
- 1992,『近代日本中学校制度の確立—法制・教育機能・支持基盤の形成—』東京大学出版会。
- 『読売新聞』広島版 1998年4月25日「わが母校11呉三津田高校③」。
- 渡辺一弘 1999,「戦前期における中等学校文化に関する研究—岡山県を事例にして—」『教育学研究紀要』第45巻 第1部 中国四国教育学会編 226—231頁。
- 2000,「戦前期における中等学校文化に関する研究—岡山県を事例にして(Ⅱ)—」『教育学研究紀要』第46巻 第1部 中国四国教育学会編 163—168頁。
- 2003,「岡山県の旧制中学の校風—岡山一中と岡山二中を中心に—」『岡山地方史研究』100号 記念号 岡山地方史研究会編 148—159頁。
- 2006,「後発旧制中学の学校文化に関する研究—広島県呉市を事例にして—」『八戸短期大学研究紀要』第29巻 八戸短期大学編 49—68頁。

《付記》資料の引用に際しては、旧字体の一部は新字体に改め、句読点や濁点を付した。また明らかな誤植、間違いと判断できるものは訂正した。本研究に関しては、学校所蔵資料の閲覧・コピー等で、岡山操山高等学校(旧岡山二中・岡山一女)、岡山朝日高等学校(旧岡山一中・岡山二女)、呉宮原高等学校(旧呉二中)、呉三津田高等学校(旧呉一中・呉一女)各校の同窓会事務局先生方に大変お世話になった。記して謝意を表したい。

なお本稿は、日本教育社会学会大会第52回大会(2000年)での発表「後発旧制中学の類型化に関

する研究—明治後期以降開校の旧制中学を中心—to」を大幅に修正・加筆し、新たに論文として執筆したものである。